

ゆきの出羽路

+





登	611.4	登	651.7
函	442	函	442
番	20	番	1

零れそち

十卷

本郷増田邑

寄郷拾箇村

そほのらま 縫殿一 いもづき 新古内六

このまど 八木二 中保のいぢ田 腕越七

くもほの柳 二井田三 銭けさくら 上亀田八

鈴田のいぢ 古内四 勢ふら田 下亀田九

あけきやほと 新関五 いぢくら 明澤十

五十二卷

金田のふりかへり
金田のふりかへり

曾田村
里長 伊

益田 外田 竊田 増田 真田 沙田 水田 書田 漬田

益田郡小益田あり近江國津井郡は益田あり此等の國

本朝書目

大正拾五年三月拾八日

増田村
里長 伊太郎

秋田縣立
圖書館
構子分館

登	6515
函	442
番	11

天正ノ軍談ノ事々々増田城主最上義光郎徒長瀨内膳
と人人居城々々前澤筑後入道受取りて今宮攝津守
居々々増田館や益立かゝりてあつていふに續紀廿六十三卷
云々寶龜十一年三月云々今已以中納言從三位藤原朝臣繼體爲征
東大使正五位上大伴宿禰益立從五位上他朝臣古佐美爲判
官主典各四人と云々甲午以從五位下大伴宿禰真綱
爲陸奥鎮守副軍從五位上安倍朝臣家麻呂爲出羽鎮守
將軍軍監軍曹各二人以征東副使正五位上大伴宿禰
益立爲兼陸奥守と云々これに益館の省治と云々
云い傳へて益田は名にわけりて土肥城といひ古城小
了と云々あさりければその世に家々土井氏といひ安永七年丙戌秋

八月某日の事々々古柵の末に封疆あり其土堤上の神社ありハ菅原理右
衛門上祖も齋奉る稻荷の社也この社のいふ迫りれば地ふははら
海くまひ此封疆で打壘耕田と云々人々て鉏鋤多しといふ大
段木の切株あり是を堀取りて堀に水はけむりて鉏鋤ありと云々
のりりれりハ紫洞の小佛一軀土較王一顆出ると云々大硯石の形と云々
石出ると云々栗石と破れり其石の面々本地所陀念奉祈氏神ハ幡宮土
井判官武運長久別當延祐教白く彫り此石の背ハ豐運王
者定基法師入宋時尊像寶玉之一度禮握者男開福
豐除諸難令安産長和五年十月日云々刻と云々長和
五年辰年と云々六十七代ノ帝ニ修院の御宇ニ定基法師と云々
三河守三儀大夫大江定基卿之妻力壽姫死ハ云々之類云々

渡末で飛鉢の法で行ひ天台山に登りて石橋を渡りて寂照上人とて誦
曲をも作てあまの世に知らる人となりて武の始の萬歳も万歳樂も進ん
鳥進の唱歌も國栖笛國栖唄のやうにしてゐる世に餘り万歳の常若も
も進の泣き唄も此郷の俗といふ大に氏土井家のものといふ家なる
の老ふしき此増田村の外田といひて武佐外の家といひて四方面のわ田
と弦の樂作りてゐる弦懸外の家といひて外田の名に此を創り
りといひて其蔓草小田といひて今も増田といふ前に増
と考ふ南田の府田村の其郷の府田といふ府の形なる小田ありと
要代といふ少田一牧を割りてこれあつて府田といふ府田の名あり
り不後人といふといふ山が郡檜山と進み新も府田村の府田といひ

矢張りその名れば此年あり外田弦掛小田といふ後世の世の人の作
りては人といふ武佐外といひて古くまゝ今も在る鉄盤といふ
外といふて汁概料小田といふ近き世のものといひてありハ此田も
わむりの益田といふ名なりつきて壺出つて其由來といふ
真土山といふ磨礪山麻當山窓山的山圓山といふ書きて
山の名澤の名村の名といひて聞えりまゝ此増田の真土山とい
真人山といひて七十三代堀河院の御代嘉保永長永徳の歳といひ
清原の真人武則の居城といひていふ山といひてわむりて
破といひていふ諾といひ物諸といひ八澤本といひ保正洞山の下居宮の祠友遠
藤氏の家系譜といひ鎌足公六世孫藤原俊経といひ遠藤九郎といひ上祖といひ九代序人吉茂孫子右近正吉
二男遠藤助大寺俊が子之康和元巳卯年當山宮侍廿方賀鈴木

白兄シロヤ鷹トビ一條帝の鳩屋ハトヤ柏鴉アヲミミガサ後一條帝の藤花フチハナ韓蘊カンウン山家ヤマカ
等々月輪ツキリン鷹トビふい愛宕山腹大鷲オホタカ峯は月輪ツキリン寺まで綱ツナせ
し今下野國宇津宮より出るとの必決物カナラシキモノといふ云々
まゐり記小唐カウシヤ街カミといふ逸エ物モノ此出羽の度タビきといふものむし此より
いふや出といふけいまた三代實錄十三卷貞勸八年より勅聽シキリ三品仲野
親王養鷹トビ三聯ミツレン鷄トリ一聯正三位中納言陸奥出羽按察使源朝臣融
鷹トビ三聯ミツレン鷄トリ二聯ニレン從五位下内膳正連ナナシ枝王エノノリ鷹トビ二聯ニレン云々
古歌フルカみりけのいけのわくふカ養鷹トビのそのけりいへくさるる
いふカ磐手イハテは奥ウチといふことといふこといふこといふこといふこと
養鷹トビといふこといふこといふこといふこといふこといふこと
こい此コノ妙ミタカといふこといふこといふこといふこといふこといふこと

享保郡邑記小増田村家貞三百三軒村始不知南の方古城あり
東西百五拾間斗北南百三十間斗土居築地跡有り土肥相摸守道
近居城ナリ羽林丸中将君辻封時最上長瀨内膳城代ナリ居前沃
筑後入道藝球受取之漸東將監義堅ナリ居ナリ按元和元年
諸所要害城破却ナリ此時城破却ナリ不審東雄勝郡
吉野村境道ハ石橋ナリ云處ナリ境夫より大川ナリ白河同郡萩野袋村熊
野洲村田子内川ナリ境山ハ麻當ナリ里尊佛岩ナリ中處ナリ雄勝郡ノ吉
野村山ト境ナリと見え支御関ナリ村家數八軒本田在所本田堰下堰ト
云々近処故堰ナリト唱ナリ也藤丸二門村同三軒藤丸二門ト云者始ナリ村故名
唱ナリ福嶋村家貞八軒慶長年中古関ナリ起ナリ始ナリト見えい
増田十文字村古ト十五野ナリといひ大なる廣野の中横手湯沢の

驛路ありは清和増田は郷に往復の欄と十字街道ぬれ人々は
 ら増田十文字より此中よりあやの狐ありて十五歳男童草刈り
 出でていそより少女の十三四歳あやの狐来ていざたまに此童のよき
 大男あや連れりてあやまゝてむつび月日経るに唯又男子持
 てあや佛よりひきつるものぞいそひていそひて親を知ら
 ぬ親を知らぬあやの神よりいそひていそひてあやの童よりあ
 て門よりいそひて親よりいそひてあやの童よりあやの童より
 その狐より神より齋よりいそひていそひていそひていそひて
 とて稲荷の神社よりいそひていそひていそひていそひていそひて
 のをいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 らぬ狐よりいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて

増田村の通貫寺 東本願の開基主人天瑞師卷る在得るの形を石に刻て
 まゝいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 の多るいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 海軍よりいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 得るの徳をいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 此は草創て家よりいそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 湯よりいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 秋よりいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 とくいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 まゝいそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
 石像地藏大士坐座 寛永五年己未正月廿二日曹 施主新古内村 治兵衛と彫多

此地地藏菩薩六月廿四日祭日いづせ三夜いづに賑へり道中記も増田十
文字地藏權現とていづのせうけさうりけきば人々も知る石がさつり

増田、肆坊々本町東四ノ田町往來新町東四ノ中ノ町往來中町南此ノ

七日町共ノ四屋小路往來上町中町より七日町上町へ是とて町いづ

市肆古より三百小立一が今々二五九小定より本町田町中町

七日町上町此五町を肆々七月五日と止て七日本町とて古くは

増田枝郷 関ノ口村

関口といづこも関所の口といはれ此ありそへ関てふ事ハいふ堰で
清濁唱へ教へ関堰のけぢめあり堰の文のむづけければ関てあるふこ

わの此色増田の南なり古ト家八軒今家十戸あり

白山姫ノ神社 祭日四月八日 齋主佐々木助之丞

平鹿村

平鹿村と増田の東に在り家負古古軒今八戸あり水六雄勝郡田子内
より落れ十六ヶ村の組合堰といふ郡色記ハ享保の頃と藤太徳村といふ
後たあり堰村ありといひそと藤太徳と始め九郎太徳清八と家
三戸ありがその家人といふ家平鹿村より移り栖家て後た徳村と絶て
此平鹿村と入ぬをいふ平鹿村と平鹿郡の創より雄勝村の後雄勝郡
と成りそが如し此郡の考と平鹿郡の最初記多し今けいさか
此地といふ比良遊ハ本郷吏詞の比良遊と訛轉り来つそと平
鹿の字より傳つていふものといふありけりとのくは津輕の五郎の内
平鹿あり秋田郡の井川澤と晝鹿野ありそ比良遊とむづろそ良
いふ郷吏詞より神武紀ハ平分尾ありそハ神代の陶へより出はむづろ

ありき田びくわびして流るるなり又世にけり本體といふも
けりき平康平賀といふれど唱ふとあやうきなり顔多し平賀氏
と世にふし傑の平賀三郎朝信と平賀武藏守義信男といふ
此平康の村と比流の轉流や神代陶器制作と更し地やあは
考ふべし

福嶋村

増田の北の方と在り古く家負八軒今九戸あり享保日記に云く享保年中古閑起
其地が地味と云ふ福島の清濁ふよみて圃に多る谷神海國南原郡
小福島海と水原新倉田との間葛田といふてとまらぬ湖ありといふ

田字地

枯松といふとも枯松のありて枯といふは枯松の名とありてこの枯

松は枯不祥といふと田の字とありて今も今も若松と稱すといふ此處
白山の社ありて今も同じ村と遷すといふと白山の祠とありて
そこよりある紫藤あり此處の花一房採るとちまたちと瘡のけり
へあやうきものありて給ふあはれ神といふ其折つる花で返す
向てうちとびいれればその飯さる瘡と瘡のけり愈ゆといふ考ふに
此白山と山堂も白山の神といふと又いふと白山の神といふと
小はれとせふ風癬と古癬といふと此病とありてやまふとあり
と白癬の省語といふと白癩と白肌と皮膚の小瘡のありていふ
方言といふとわのえと山の神といふと風癬無名毒瘡のありて折
て態ふ本間掃のありて後余小細と其古癬といふ瘡のありて
を瘡の癬といふと瘡の癬といふと瘡の癬といふと瘡の癬といふと

瘡^{ソウ}系^{ケイ}之^ノま^マ誼^ギ訪^{ホウ}社^{シャ}本^{ホン}鎌^{ケン}で手^テ酬^ユは^ハ市^シ射^{シャ}山^{サン}奈^{ナイ}の^ノ芒^{マウ}刈^キり^リを^ヲ
カ^カハ瘡^{ソウ}出^デれ^レハ草^{クサ}く^クし^シや^ヤ本^{ホン}鎌^{ケン}を^ヲ画^{カク}よ^ヨう^ウ一^{イチ}或^{アル}ハ本^{ホン}を^ヲ作^{サク}つて^テま^マハ^ハ忌^{イミ}忌^{イミ}
こ^コこ^コの^ノ道^{ミチ}を^ヲま^マ人^{ヒト}能^スく^クと^トさ^サり^リと^トぬ^ヌぶ^ブ事^{コト}一^{イチ}

石^{イシ}神^{カミ}む^ムう^ウ一^{イチ}石^{イシ}神^{カミ}と^ト一^{イチ}の^ノ杜^トが^ガ此^{コノ}あ^アる^ル開^{ヒラ}壺^フい^イま^マ五^イ郎^{ロウ}六^{ロク}浦^フと^ト
ふ^フま^マの^ノ田^タ神^{カミ}と^ト齋^{イハヒ}ふ^フ奈^{ナイ}日^{ニチ}九^ク月^{ゲツ}九^ク日^{ニチ}別^{ベツ}當^{トウ}金^{キン}剛^{コウ}院^{イン} 宗^{ソウ}本^{ホン}塚^{ツカ}と^ト道^{ミチ}の^ノ傍^{ホウ}
の^ノ本^{ホン}林^{リン}の^ノ内^{ウチ}に^ニ在^{アル}石^{イシ}碑^ヒ、面^{オモテ}小^コ未^ミ悟^{ブツ}宗^{ソウ}本^{ホン}禪^{ゼン}沙^{シャ}弥^ミ寛^{カン}位^イ元^{ゲン}禄^{ロク}十^{ジュウ}六^{ロク}年^{ネン}
拾^{シツ}月^{ゲツ}廿^ニと^トあり^{アリ}と^ト此^{コノ}後^{ノチ}増^{ゾウ}田^{テン}、本^{ホン}町^{チヨウ}十^{ジュウ}田^{テン}奈^{ナイ}古^コあ^アる^ル經^{キョウ}塚^{ツカ}の^ノ邊^{ヘリ}に^ニ葬^{サウ}せ^セ
さ^サむ^ムべ^ベ一^{イチ}遺^イ誼^ギハ^ハ此^{コノ}塚^{ツカ}を^ヲあ^アり^リび^ビて^テ經^{キョウ}塚^{ツカ}あり^{アリ}と^トの^ノ碑^ヒハ^ハ奉^{ホウ}寫^{シャ}石^{セキ}
一^{イチ}字^ジ三^{サン}禮^{レイ}大^{ダイ}乘^{セウ}妙^{ミョウ}典^{テン}經^{キョウ}全^{ゼン}部^ブ 寛^{カン}永^{エイ}元^{ゲン}年^{ネン} 仲^{チュウ}八^{ハチ}月^{ゲツ}廿^ニ四^シ日^{ニチ}云^{クニ}々^々名^ナハ^ハ定^{テイ}ハ^ハ定^{テイ}ハ^ハ
館^{カン}ヶ^ケ岬^{シマ} 上^{ウエ}関^{カン}、に^ニ一^{イチ}本^{ホン}柳^ユ 北^{キタ}々^々京^{キョウ} 北^{キタ}々^々高^{タカ}野^ノ 北^{キタ}京^{キョウ}塚^{ツカ}腰^{ヨコ}
廣^{ヒロ}町^{チヨウ} 町^{チヨウ}源^{ゲン}と^ト燈^{トウ}蓋^{ガイ}又^{マタ}柳^ユと^トい^イふ^フ

五^イ本^{ホン}柳^ユの^ノ布^フの^ノ跡^{アト}

瘡^{ソウ}柳^{リウ}ハ^ハ藤^{フナ}壺^{マキ} 稻^{イナ}荷^カの^ノ近^{キン}に^ニ在^{アル}今^{イマ}ハ^ハ枯^カれ^レて^テ瘡^{ソウ}を^ヲ人^{ヒト}と^ト此^{コノ}柳^ユ
の^ノま^マを^ヲ採^{サイ}て^テ糸^{イト}に^ニく^クけて^テい^イま^マ吹^{フク}一^{イチ}む^ムれ^レハ^ハ瘡^{ソウ}の^ノか^カけ^ケれ^レぬ^ヌ瘡^{ソウ}と^ト
う^ウ一^{イチ}を^ヲ得^エる^ル人^{ヒト}と^トま^マさ^サり^リて^テ此^{コノ}柳^ユの^ノ茵^{イン}と^トあ^アる^ルま^マの^ノと^ト其^{ソノ}後^{ノチ}糸^{イト}を^ヲ
ま^マさ^サり^リて^テ糸^{イト}を^ヲ繅^{サウ}ふ^フ此^{コノ}柳^ユの^ノ根^ネと^トあ^アる^ルま^マの^ノと^ト其^{ソノ}柳^ユを^ヲ枯^カれ^レて^テあ^アる^ル
あ^アら^ラた^タと^トり^リて^テ来^キて^テ此^{コノ}糸^{イト}を^ヲ捨^スて^テい^イければ^バ其^{ソノ}糸^{イト}ハ^ハ瘡^{ソウ}を^ヲあ^アら^ラぬ^ヌこ^コの^ノ
渡^{ワタ}部^ブハ^ハ田^タ町^{チヨウ}の^ノ南^{ナン}裡^リの^ノ田^タの中^{ナカ}に^ニ在^{アル}と^ト近^{キン}に^ニあ^アる^ル其^{ソノ}柳^ユを^ヲ人^{ヒト}の^ノ伐^{バツ}り^リ
あ^アら^ラせ^セて^テ渡^{ワタ}部^ブ某^{ナニ}と^トい^イて^テり^リと^ト人^{ヒト}の^ノ塚^{ツカ}の^ノま^マを^ヲり^リと^トい^イふ^フ

大^{ダイ}房^{フウ}柳^{リウ}ハ^ハ古^コ柵^{サク}の^ノ北^{キタ}方^{カタ}に^ニ在^{アル}一^{イチ}む^ムう^ウ一^{イチ}に^ニ枯^カれ^レて^テ其^{ソノ}根^ネを^ヲ今^{イマ}ハ^ハこ^コの^ノ
さ^サら^ラハ^ハ知^チれ^レぬ^ヌ人^{ヒト}が^ガ一^{イチ}大^{ダイ}房^{フウ}ハ^ハい^イま^マぬ^ヌれ^レぬ^ヌ人^{ヒト}と^トや^ヤ坊^{ボウ}舎^{シャ}か^カの^ノあり^{アリ}地^チや^ヤ南^{ナン}
部^ブの^ノ麻^マ角^{カク}部^ブハ^ハ馬^マ内^{ナイ}は^ハ月^{ゲツ}山^{サン}の^ノ別^{ベツ}當^{トウ}石^{セキ}剛^{コウ}院^{イン} 修^{シュ}験^{ケン}者^{シャ}の^ノ鼻^{ハナ}祖^ソで^デ大^{ダイ}坊^{ボウ}と^トい^イて^テ岩^{イハ}

室家係りて柘家多し其柱今も残りて家藏するは延暦大銅の世
 此物諸大やもあけりる一本柳こゝいり古より下生る大柳の前
 田字処に云い柳こゝやもい柳燈臺板の柳こゝやもい柳久保田
 やもいやもい柳の名木何れか枯れず葉燈臺木とて三岐の木ハ
 山より何れ残りて山神と多祭するといふ

古木大樹

大槌本所阿部五郎兵衛より此樹高サ三十尋のあり此家
 ハ阿部五郎大樹尉某とて土肥家の臣なる事云々云い此樹
 其世のりなり大槌木九七八汁やこゝ實成より此木のり宗和隊の処云
 い十田氏表右の庭に在り此増田の旧家也每朝の皂莢ハ綾後村の通寛寺
 の後で在り此皆瀬川流古河の上へある所の板の傍に在り下古川の端あり

増田十文字村 此家ハ

本十五野とて大野よりて
 南河川の岸より五十年後きこゝ
 増田十文字と云ふ

文化十四年小家

一戸仍て人住し
 今ハ九戸あり

増田十文字村の
 家々
 副の

増田の

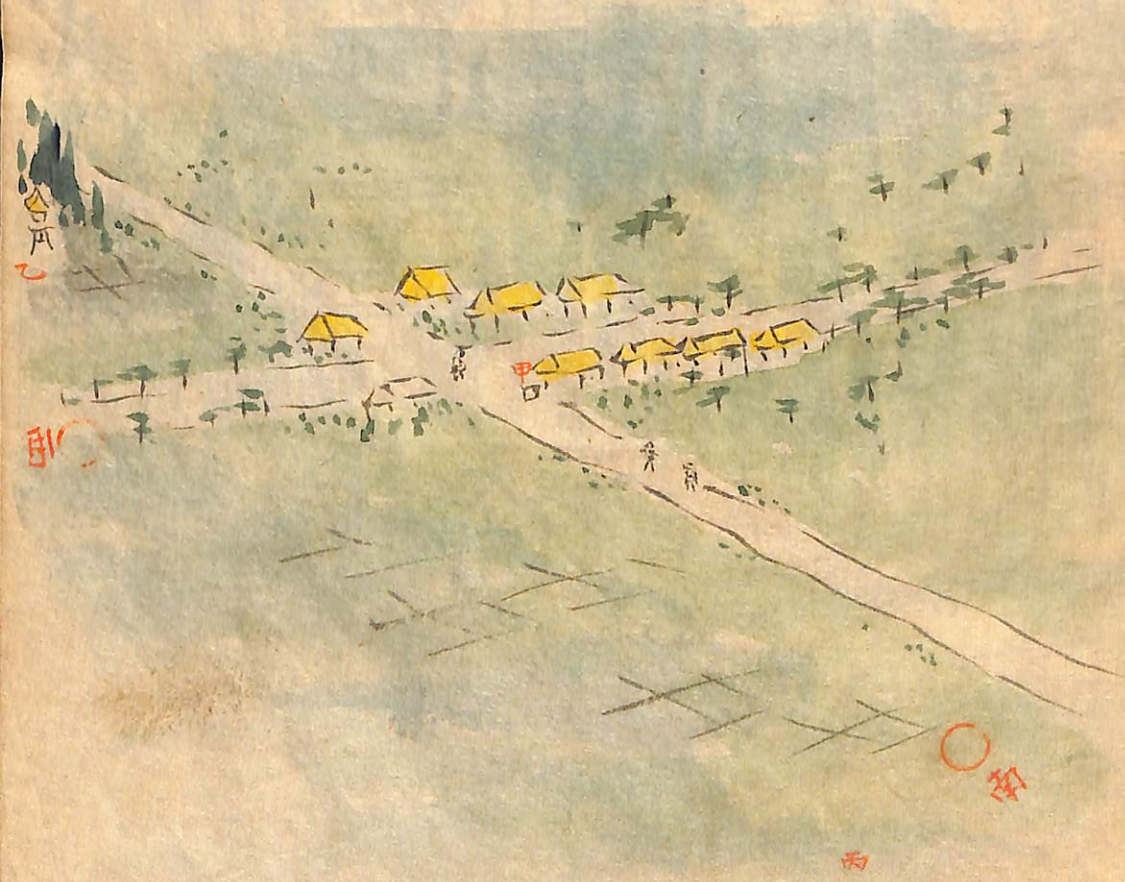
傍石

石地蔵菩薩の

本行増田村の部

五六家のところか

ほげろろろ



神明宮、^{ウラトリ}神門 甲

二升田邑 乙 八木邑 丙

皆瀬川と隣

岩崎、^乙桐原田大縣古城 丙

増田村、庚入口

幸蛭兒、社の雛居

安倍の土大槌

足すき

園

○ 廿五

乙

甲

○ 卯方

丙

士

辛

庚

○ 廿五

病柳 ハサミ
 ねきこしせー柳之此本
 枯てその跡ささく塵整のこしー
 谷ききき木柳のーしりい
 人の語ささくすて凡その柳のこしー
 ちしきり

藤纏稲荷神 アサキ

石田稲荷

最上屋稲荷

大の胡桃小
 藤蔓の纏い
 ちしきり神坐せハ
 ちしきり神坐せハ
 稲荷のて石田即ち町とさし
 此高社でこちてあふふ神社で
 ちしきり神坐せハ
 ちしきり神坐せハ
 ちしきり神坐せハ
 ちしきり神坐せハ
 地土の神ふしきり神坐せハ



月山社 末社 愛深明王
 藥師如來 虚空藏菩薩
 觀世音 稻荷明神、社

月山、碑 縫殿邑通覺寺の
 同寺主人建り
 此月山の社に入る小路を
 むろしとす小路といひ
 通き世々々々ハ
 月山と改められけり
 といふ



土肥の古柵 北西らまふ
 中々として古木の大柵一本せいといふ
 此柵も月山神の舊社地なり
 といふ
 三代實録廿九卷ふ
 貞觀十八年八月二日 檢出羽國
 從三位勳五等月山神正三位
 從五位上藤原朝神をいつの世か
 此地ふりつゝまつて今其の
 齋觀のこゝか
 といふ



土肥、次郎道近の古城蹟
 甲 隅櫓の跡より、真人山、三角林
 望との見、直一といふ、ソウの
 外堀、ハ、古河より、草生ひ
 水草生ひ、多、館跡を
 三、姓より、高と成り、小屋立、
 あり、あり、人の家、居り、あり、
 さげ、う、廣、う、一、粟、地、
 外、と、存、跡、あり、あり、こ、あり、
 田、畠、あり、あり、あり、あり、
 け、あり、あり、あり、あり、
 在、一、世、で、偶、ふ、の、こ





○舟繋の甲

皂莢木ハ

乙縫殿邑の

丙河の坂

丁西屋村の

近き

其の乙

大樹のくさ

委曲に

丁

手此木

うぶ神とふ

産神の

夜の人の

来て居る

それと

おいて居る

もの人カ士と

甲 神カ 神カ 方言

本町^甲阿倍五郎兵衛、
家の庭に在り
大榎いつこゝ
ふゆれ大あり



神社

神明宮、増田の真西にあり、自其久遠より田井の水流の
邊往復此道の傍に松林あり、林の中より鎮座し、祭日六月
十六日十五日ハ齋夜とて放火しちかど賑ひしゆゑある神社と

未社菅大臣社

別當修驗金剛院

月山社、舊社ハ今宮の後あり、大榎の本より鎮座し、と近き

此宮地ハ遷し、まづいり、本社南向、未社右、愛深明王、樂師兼

虚空藏菩薩、尤勸世音、稻荷明神、社あり、別當修驗圓満寺

祭日八月十五日、神樂奉り、練子花車あり、をいねり、ねり

一年ハ一度大祭にして、増田一郷の本居の市神とて人々を人群

本社、屋敷ハ棟より杉のまき、いりて、葺き、此置棟、靱繪の紋、附あり

いとも三巴の水の形して火災で防ぐの義なりて尾の端は棟板など
画のよりけり三巴の世に八幡宮の神紋ありていふに此の神
のゆゑなりといふ所社と人同く其人のいふこといふ給ふに
からつるばうさういふに福徳月山の神の神輿を皇都の宮にて
もに送らるべしといひねりて細人にも是れ神輿の神輿あり
その約せし主人こそは異郷の神輿にても是れ給へる國に似
つらぬ神輿にてもいひねりていふに似たりといふに似たり
八幡宮の神輿にても金具の文飾もいふに三頭巴にこれ見給へて
だてていふにても見せしめをいふに光輝煌々出羽人といふに
いふに思ふに都人金具の價といふに直りていふに是れ估といふに
諾来けり其後此神社にてもいふに風聲の饒紋画といふに

あり三輪繪を附するといふに此のやうにあらまの杉のりといひ
新しき碑を建てて其石に當社月光山者往古小笠宗信濃守冬
廣當所居城其後土肥相模守道近文禄年中追居城中に大
守所尊崇也雖不知開闢之年代今所存本尊彌陀如來之
本像師之佳以古社地之大槻元計馬既可及年十餘年欣其
後元和年中小笠氏當所居住再興此地奉寄附阿弥陀
如來之像今之前立本尊是也後明暦二年一御懸志本
堂未社漸々建立矣別當者從清光院至今圓滿寺者忍代
十四世連綿相續也為社地也田畝出產香稻東的山對本
堂正面明月輝寶殿南望極駒嶽西山映斜日之所常觀
月安手之來迎北續于古城増田屋舎數百連毫末沃人家數

里產物汙馬出奥羽遠御旅客不絶商賈相與作於市農
夫相與歌於野的山之麓有清水在應和是平鹿郡中水田之原線
流為數萬石之水元矣郡守因茲名今之新堂者宥忍積年之志
願以一村和合大志文化兩子建立其餘神輿壯嚴祭祠
巡行之器物亦備矣可謂中興盛采也嗚呼世之變盛衰
今古同笑無記錄不辨其年代日語電氏三省曰傳于後世
不知刻石余曰文雅之世刻于石可稱碑文余聞碑之文法如
何烏三省曰有賦却邑之號古歌錄意而傍著當社之事
為碑乎余曰是大吾矣近世所建芭蕉碑今蕉翁之一句佳
古歌附急當鄉古昔蕉風之誹人所詠殘存發句並近世余知
已之徒所詠錄碑之傍余寸志所冀為令繼后世雅志也後

之君子視余文之拙勿失雅意

詩曰敬篤增神威

信深増莊妍 國豊増民屋 邑富増良田 石表小

出羽の平麻の御意多うとてお矢のたのまに源光俊朝臣

あつま地々鳴麻の音け平けけの年より増田面藤原朝臣

久保の山や出羽の初此家の子 芭蕉公同

小節のちのちの音け平けけの年より増田面藤原朝臣

さしきとていって除ても後系うね 如漢

まゝのまゝの沖けと極うな 哥音

是れが乳母の口けと極うな 亭子

若竹やこゝろと極うな 白鳥

何となくまゝに極うな 保紅

夜とせし時ていふく柳の国

ぬ睡

あはれとの清きも眠る柳の国

市柳

文政二が六月 通覚寺前住 天瑞誌

とてあると歌などあやまりしうけがき事と
多うねとせよとあらうとありつるまにさう

蛭兒社神社芳詳節ニキ棋川蛭兒天照大神事八十神大己貴元

在西宮五社之内俗呼蛭兒為夷三郎いさえ

此等ハ合殿ニ鹿嶋廣田三柱ノ神神鎮座リ糸日ノ

ごくに六月二十日

祠官高階相模守宣政

此社ハ本所の西ありて極いさきとあることと人々ち
又つていふに人々のつとまづさやまらるる

道祖神ハ町の所切柳ノ内ノ座リあり林九左衛門

中ノ人田井堰造りて自然石ノ雄元ノ堰得て道祖神

ハ齋いする事

別當修験金剛院

新所辻社、庚申松群カをさるるまやうゆゑありて市神

とていりなきと申す所のことなり

合河原、明神、合河原堰の出来福路の傍小祠あり三河村の

土氏、藤吉、おふとの狐魅とてうりあやみその狐退し

ハ儀奈ノサ祠と造りてふと地ハ合河原弟とてや経る狐

ハ合河原ハ合歡奈とて本合歡の木とて多々知りふつる谷や

金泉山大明神 金山彦市神 本所依藤勝吉郎ハ内神

古昔此家鉄工ありて此地ハ齋なりと市神とていり

福島稲荷明神

齋主 奥右衛門

上町菅稲荷社 長和五年の彫刻石塔に菅原宣門家之
富藏稲荷明神 縫殿村の皆瀬川の向に在り本と留舎を
すてしとて神なりとておつぬりて富藏と地の名を改め
る唱ふ此河邊と破風の多き如くすづる事と云ふなり

水神社 真人山より

別當圓満寺

赤水澤の龍不動明王石に刻て瀧の内より齋ひなり赤水沢ま
中の深金堀澤にあり麻當山の麓に在る名どもに

八幡宮古社地

土肥稲荷古社地とあり明和のころありむ

増田山万福寺の開居佛刹よりあり古城三王を宗え一時に在り
其神もとも宗えありはけむ今とてその神のけりともなり

ハダキ事ヤカもありけり

藤巻稲荷 最上家稲荷で其数いり多く十六社計り鎮
座より凡そ稲荷とて稲荷明神と齋ひまつぬ稲荷いり
のつらとて人必し祭る稲荷の神使とふは伊勢鎮座
記小字順師魂神亦名専三狐神とありぬとも三狐師
撰律の義にさる部俗稲荷とて直に神とて稲荷を祀る事天下凡
そあり谷川土清より稲荷とて稲荷さまといふあり稲荷の殿ふ
処より極吏人にもリカイトありまじ平康郡の甕の綱実の長崎
と稲荷の後撰稲荷とて稲荷とて稲荷とて稲荷とて稲荷と
いふことありてありてありてありてありてありてありてあり
挿はる奥八左の漢人より真澄よりあり

白山神社此神社事ハ前ミナモト字地のところと云ふこと
まじりまゝに記す

稲田神として石神と稱ひ祭日九月九日別當金剛院事
前よりおろすまゝに記す

高階室政家系譜

増田郷廣田大神宮祠官高階相模頭藤宗室政上祖々
淡海公二十代之後胤高安豊後守英高河内國高安郡住男則家創
弼正木判官母三條高倉家之女康治元年源義朝公屬
幕下保元平治雖顯武功戰死

二代則綱弼熊太郎河内國ヲ離散武藏國ニ下向大里郡高城
明神之祠主依為縁者假住ス誓神前始而氏ヲ改高城寿永二年
源頼朝公幕下成リ畠山ニ加勢カ猛勇之譽有元曆元年西園
寺討死今并ニ郎雜色之兄弟之女子早世則隆号高城三郎
文治四年奥州ニ下向
三代高敷雅樂之入則綱之子住筑前鶴箇城建三年

九月十七日卒

四代重光正和四年二月廿七日卒年八十二歲号峻龍

五代重匡兵部太夫有故改高階氏延文二年九月十日

卒

六代富鄰号堅治郎重匡之弟出羽國仙北下向康安元年卒重匡依子立世子

七代敬安号慶太郎永享五年二月十八日卒

八代宣喬号元京之次文明二年五月二十日卒恭直雄勝郡稻庭住女子麻倉九郎兼春室

九代重齋号治部少輔永正十五年五月卒

十代貞政吟治郎天正五年丁丑秋卒是ヨリ世代不知元

祿之頃平康郡新田村ニ住スト云リ今其處ニ靈跡有ト云フ

十一代治次高階右近以後号治長寛文八年二月廿八日

卒神號高光春雄命

十二代重方治部太夫享保八年卯六月十二日神隱

靈號高慕靈命

十三代秀雄織之助安永三年甲午三月十八日神隱

靈號大元高津藤宗秀雄神靈

十四代重治土佐守寶曆十一年辛巳八月十日神去

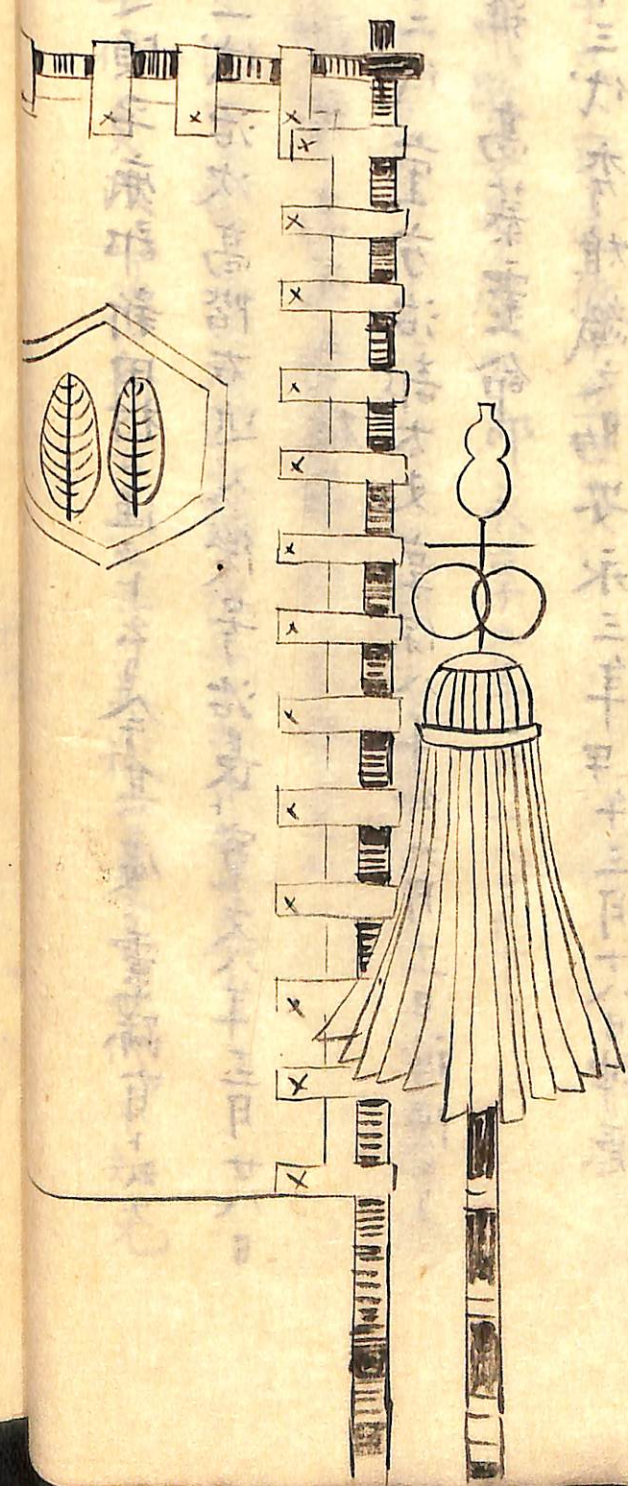
神号天曉藤宗重治靈社

十五代重久長門守寛政四年壬子十月四日卒

靈號神官藤宗重久神靈

十六代室定因幡正文政二年己卯八月廿五日卒
 神祇高津藤原室定神靈
 十七代當職祠官相模守藤原高階室政二

高階氏上祖家紋五七桐亦二室六角内三枚鷹羽二



修驗元弘寺

寶珠山元弘寺族姓系圖其創主云淡海公一五代

為憲維義長男二階堂元祖遠江守時理駿河守時信駿河守維遠遠江守維光遠江守

維行遠江守行遠遠江守行政山城守行光信濃守行盛民部卿

行忠法名行清行宗丹後守行圓辨信濃判官後胤彈正忠通

行住出羽六鄉行栄勸月寶珠磨辨才四郎

父二階堂丹後守藤原行宗母侍女山田氏近江国大倉村人也

曾詣本州竹生嶋一夜夢異人與寶珠也寤怪之則獲怪石

一屹於檻前後數月有身遂以人皇九十四主花園帝延

慶二年己酉八月辛酉生因瑞夢寶珠丸有故毓于近江國

益田里從母族以山田為氏正中元年甲子歲南十六加冠改名并西郎

觀

行采此時天下分南北朝野苦于戈盛衰夜々寢采辱日々殊
行采患如斯不差寒暑予矢恒懷脫白之志元弘元年辛未
八月既望年二十三登比叡山無動寺拜不動明王尊像且想像
先哲之修力通宵不臥耽已五更遙聞讀經之聲至視王
侯之位如過隙塵仰見天圓月稍缺乍勸世之無常即身
自得為優婆塞結髮佩刀親誦觀月房之訪侵君之遺
跡吉野即以南朝之皇居不能入獨修密來之心印也已正慶
二年癸酉年二十五聞從弟伊勢守藤原忠貞與北條越後
守平仲時等於近江國番馬蓮華王院自殺而適吊之
尋拜竹生嶋雲遊四方曆應三年庚辰年三十二復還于益
田里明年事已娶東海林氏貞和元年己丑生一女文和元年

壬辰年四十四夫妻與女子俱云々巡拜諸國之靈場負笈杖錫
將出則其母謂曰有一片之怪石在急吾曾夢想之靈瑞也今
付爾宣護持以傳後昆也特受藏諸笈中互眼掩淚分手
東西千山萬水客路緬邈延文元年丙申年四十八到奥州伊澤
郡里富日光山多寶院居七年主謂曰五子歲過五旬女子
年甫三七以余之第三子寶山者清女惠觀月固辭不從謝
恩分手去掛錫於出羽國羽黑山住蔭貞治三年甲辰秋遊
化同國東隅山村恒以乞自活到一村落問邑名或對云大倉
村也於是唱然歎曰吁此何宿緣我母氏之桑梓同名之地也悲歡喜
脫笈啗錫結一草庵求索者必乞皆加持無不有驗人稱之曰不
勤房貞治六年丁未奥州多寶院聞其雷錫於鄰國之使其子

寶山為螟蛉強求婚觀月感其懇篤不得止事應需寶山時
年三十性質溫良修刀炳然尤其器也明德元年庚午觀月年
八十二暮雲歸鳥頻起懷土之情於是寶山為慰其志以邑西
北一里許外田村議移居觀月憶殘齡將夕遂遷于外田村
曰此則我所鞠養之地也誠永久不勤安住之地一旦從俗稱以名
為不動院應永四年丁丑十二月八日以卒于房享年八十九初自
元弘元年發菩提心六十七年于茲勤行如日篋中所藏之寶
珠石今在元弘寺道場

二世空外寶山法印 父奧州伊沃郡水澤里日光山多寶院母
波多氏以貞和四年戊子生延文二年丁酉十歲得度貞治六年
丁未春為觀月之嗣子至德元年甲子生男子為三世應永四

年丁丑觀月寂於是繼家又弗不動院永亨十年^戊午二月七日
享年九十一住職四十二年

三世藏海寶鏡法印 寶山之子母觀月之女也至德元年
甲子生應永四年丁丑年甫十四得度同三十九年壬寅生男子此
為四世永亨十年戊午寶山寂則兼家緒又弗不動院文
明二年甲寅七月六日示寂壽八十七住職三十三年云々

四世蒼巖嚴文海法印 寶鏡之長子母氏未詳以應永世
九年壬寅正月生嘉吉元年辛酉年二十而得度文安五年
戊辰娶邑人高橋氏明年己巳生男兒不日折長祿二年戊
寅生一女亦大云々文龜三年癸亥六月廿八日寂年八十歲

五世日高智雲法印 文海子之子女野寺氏以文明七年

乙未十二月朔生云々永祿九年丙寅八月二日寂年九十二
六世蘇峯省洽法印智雲之子母後藤氏以天文六年
丁酉八月廿日生小字曰武吉云々元和七年辛酉十二月二日寂享
年八十五住職五十六年

七世大夢快了法印省活之子母橫手大應院女也以
天正十年壬午三月生慶安四年辛卯五月六日寂年七十
八世乙翁快休法印快子之子母伴藤氏以元和八年壬戌
八月生寬文十一年辛亥五月廿六日寂享年五十一廿二年住職
生平喜嚼柳枝以換筆遺墨尚存惡天明丙午之回祿為
灰塵可不惜也乎

九世白英快重法印快休之子母依永氏以寬文元年辛

丑五月晦日生幼字平太同十一年辛亥快休寂云々元文三年

戊午正月廿三日寂享年七十八住職四十年閑居二十八年

十世古嶽省泉法印快重之子母小笹氏以元祿十四年

辛巳正月七日生寶曆六年丙子九月遷化壽五十六

十一世智得省光法印省泉之長子母伴沢氏以享保

九年甲辰三月生小字平太延享二年乙丑六月七日遷化

享年三十二故不娶云々

十二世中興柳采勸束法印省泉之仲子省光之弟也

母伴澤氏以享保十四年己酉八月辛酉生小字喜平云々

享和元年辛酉十月廿五日未刻遷化說偈言不來無法法

日明自己新化緣今已滅可知佛意深壽七十三

十三世庵頂存宥法印 宥泉之太子十二世同母之小弟也
以寛保二年壬戌三月十六日生小字曰小六云々 初祖行者
菩薩一千一百年之大遠志開謝德之法筵此昭神變大菩
薩文化六年己巳六十八登湯殿山至此登山凡六十度又登鳥
海山三十三度於是立塔以伸供養同九年壬申年七十一退
休歸一蝶菴天性好力遊不厭寒暑不憚山川暑鞋携錫
不乘輿馬勉潔齋云々 文政三年庚辰四月當午遷化春秋
七十九住職二十三年閑居九年

十四世現住無逸如三法印 存宥之子母院内南岳院之
女也以天明三年癸卯十二月廿日生小字曰傳六寛政六年
甲寅年得度號教善房云々 乙卯年遷化

圓滿寺 修驗者

如意山圓滿寺の開祖清光院宥善云 土肥次郎實平、
末孫増田城主土肥次郎高平三男主計久幼少云々より佛道
かこつたがしぬくつてそのあらわし 圓滿寺の聖尊寺より真言
宗の弟子より諸國の靈山修行してやうて改宗し正長元年
當寺より智行あるつうとあるが近村遠里山と海との奥に
多分祈願所と頼み人云々仰禮のむづびとありぬかして

應仁二年戊子十月十五日遷化 行年八十五歳 二世月光院 宥嶽

明應六年丁巳七月三日化 行年八十五歳 三世定觀院 宥鉸大永

六年丙戌年八月八日化 行年八十五歳 四世千手院 宥源永祿二年乙未七

月杳化 行年八十五歳 五世専光院 宥樹天正十四年丙戌十月七日化 行年八十五歳 六世

見林院省傳慶長十四年己酉九月十一日化六十一 七世喜寶院
省胤寬永十三年丙子八月六日化六十一 八世和光院省英慶
安四年辛卯三月十五日化五十一 九世正善院省禎寬文十一年
辛亥六月廿一日化四十一 十世善長坊省長享保十二年丙午七
月十五日化七十一 此代林光坊定寶年間小瀧澤村小別院とく
多寶坊寶永年間田子内村小別院とく

十一世喜寶院省正明和五年五月廿八日化七十一 十二世明泉院
省觀延享四年丁卯四月廿四日先住三十一 早世之四十一 十三世喜寶院
省快明和三年丙戌三月繼目相續明和七年庚寅七月圓
滿寺とく師許容とく文化六年己巳四月十一日化行年六 十四歲 十四世當住
世尊院省忍寬政年丙辰背骨相續文化十一年甲戌四月大頭職の作をの作を

修驗金剛院

京安養山無量寺とくいり真言土寸とくいり其世とく
とくいり人可とくいりけい安養山金剛院とく増田城主光實公
の師祈願所とくいりいりいり上祖新藏坊省實とく
延徳元配年とくいりいり永禄元とく年七十九歲とく遷化二世神子
元龜三年壬申二月十五日終 三世吉野坊省親とく
寬永十三年丙子二月七日化 四世金剛院省和坊寶永
七年己巳五月廿九日化 五世和合院省除元文四
年己未七月五日化 六世和合院省壽同年六
月廿四日四十一歲化 七世金剛院省塔安永三年
甲午十二月廿六日化 八世和合院省芳天明四年甲辰

八月廿七日化 九世和洋院者觀天明四年某月某日化
十世圓覺坊者承存主十二世當住和合院寬全防之

満福寺

増田山満福寺、本山ハ奥州磐井、郡一関、額成寺開
山、梅宗元香和尚一宗ハ無端派、二世龜道文賀代永
享十二^耗年開闢、梅宗元香と鼻祖とす、其世増田
城主土肥次郎高平、三世梅翁正倫之時、城主土肥相模守
貞平、文亀二^十年、四世在天継富之時、城主土肥次郎吉平
大永三^十年、五世玄山玄的之時、城主吉平の代、太田形部某の
敗軍、此落城の後、城主吉平上京あり、そのとき、土肥家ハ大
旦那、當寺、本尊ハ弥陀如来、立像春日、依此本像、城主
鎌倉より傳來の師佛あり、五世玄的任職の時、文文十三年
甲辰、四月三日、夜大風、殿堂吹倒、火出、此回禪十會、以て

遺物合刻古記禄子し傳ふ存ぞうのう唯ただ本尊ほんそんと并ならぶものなり

滿福寺歴世

開山梅栄元香元弘可非和尚二世定道文賀和尚三世梅翁
正倫和尚四世在天鑑富和尚五世玄山玄的和尚六世雲
室元龍和尚七世食室天悅和尚八世鳳菴全道和尚九世
國山是春和尚十世僅菴卓存和尚十一世愚菴貞龍和
尚十二世江菴尊國和尚十三世孤室林峯和尚十四世元山
澤峯和尚十五世夢宅古流和尚十六世得應禪髓和尚
十七世心寶梵善和尚十八世天慧寶幢和尚十九世大忍眠亮
和尚二十世大圓觀明和尚廿一世現住活參禪國和尚
當院末山拾五箇寺一淨祥色龍泉寺二開山滿福三世一

今宿色藏傳寺一開山滿福二世一八幡色慈眼寺三開山滿福四世一
五世一岩井河色龍川寺二開山滿福三世一大倉村常四在寺五開
山滿福六世一川連色龍泉寺二開山滿福三世一馬鞍色黃
龍寺四開山滿福五世一鍋倉村永藏寺六開山滿福七世一高
寺村龍泉寺八開山滿福九世一田子内色永傳寺十開山滿福十一世一
赤袴色少林寺十二寺十三開山滿福十四世一醍醐村長泉寺十五開山滿
福十六世一湯屋村正雲寺十七開山滿福十八世一樽屋内村圓融寺十九開
山滿福二十世一西野村西光寺二十一開山滿福二十二世一

滿福寺開山祖梅栄元香和尚一松原二御神陀洛禪寺三
鼻祖四月泉良印禪師五の嗣法六六世雲室元龍和尚七が八多九あ十ら十一じ十二
嗣法十三七世食室天悅和尚十四前十五從持寺十六嗣法累世十七あ十八ら十九じ二十

鎮守社

白山大権現

祭日九月十九日

秋葉大権現

祭日三月十八日

梅榮櫻由来

開山梅栄和尚のくは盤井郡一閑より寄給ひ一極本此
杖とて法の宗此本は枝系生ひて此地へ給ふまゝ枝系は
一て花ありてくはといふ東國見聞池後篇より平鹿郡増田町満福
寺の生櫻ハエサクラより大本より古代よりありて花ありてき名本は此極の開山
梅栄和尚の自殖ミミコラサレして師つとありて給ひて梅栄極といふまゝと俗
説ハヤするも極といふ元禄のころありて此極のわきふ盤井にて庭
くはといふまゝと新の之に事あるが幸ひ此極と新の代りてんて

やぐてんとて伐倒してけりて檀那の翁来りて大木なりきとい
ひて伐せ給ふが極の開山梅栄和尚の心にてめて誓てゝゑを給ひ
一石本は花咲風を厭ふといひてけりて事ありて涙を
してひかりはらちりてけりて此さくら伐せつ和尚の
てさきに新のものをその極のものを伐なり一枝をほてりて
そのやうなやうな極の木の下の埋れがまゝ木の本の芽さ
花いまう咲きといふまゝとて天明六年丙午は四月八日
はの朝より大風吹火災りて此増田の町家ありてき
焼くが春木の本の芽は出て花咲かして三十五年と
文政四年壬午五月十三日午のときまゝ火出てこゝに
極も焼くが春木の本の芽さきとてけりて

もろ中き梅葉の杖はくわうと人あやをり

本所 千葉九郎右衛門家藏

平氏正統の家系譜ありその下巻のあり

千時延暦三年 千葉系圖平氏從

桓武天皇十九代常室羽州仙北千葉初之

千葉大學助平室房

千葉大學助平常房 — 男千葉六郎三郎

千葉石田平八郎室之 小若九郎三郎 彦作 一子太郎 彦市

千葉善 六女 まんこ 七男 こしら磨 ハサ おてしこ

千葉六郎三郎、子女子三人 二女 たつこ 三女 とくこ 三子 こ

千葉大學助平常房

千時寛永元年霜月吉日 千葉六郎三郎平常久 八子 とくを

本町 石河新兵衛家藏

三社ノ託宣 一軸 土肥氏 勇信也

とくとも是増田の城主の真翰なりといふ

まゝ雄勝郡八面村の高橋平左門の家藏に杉田新兵衛より

人の書づる三社の託宣あり此松田氏の土肥勇信の師なり

といふ

同慶 同家石川氏家藏

草書より龍形の龍字の奇書あり光明菩薩の書あり

とみ光明がさつと人の称なりと實名鈍海和尚といふ

本町十右衛門家藏

増田本町阿倍五郎兵衛の家より小野朝臣道風の真跡に龍虎の書あり

此阿部氏の舊き家より年経て根の大樹に似たり土肥氏の家臣より永慶軍記

に阿倍五郎を二門尉とあり此家の祖とせむと土肥家の城中より出入せし座

當坊師が口より出しはるる水より穢れ流れて城中の水より

水責みあひいりて此阿部の家より正月三日つるまで青誓のもの

家より入る事と禁む恒例なり道風の書に三河國額田郡に在る院

羅尼山龍山寺の山門の額に龍山寺とあり道風の書にまづ缺くといふ

さうけれど阿部の家の龍虎の二字はこゝのものに押しをかりて一軸に

あつてこの書をあつて人のせうぶをみる人おまぬいりてまゝ

き道風の真跡なりとまれぬとて尊びてと字に

一

A faint pencil sketch on aged, textured paper. The drawing consists of several overlapping, curved lines that form a large, irregular shape, possibly a face or a stylized figure. On the right side, there is a small, distinct oval shape. The paper shows signs of wear, including creases and discoloration.



六 卷 四 第 一 回 第 一 章 第 一 節



龍ノ鏡首直二尺斗中カッ高ク九金ノ如ク

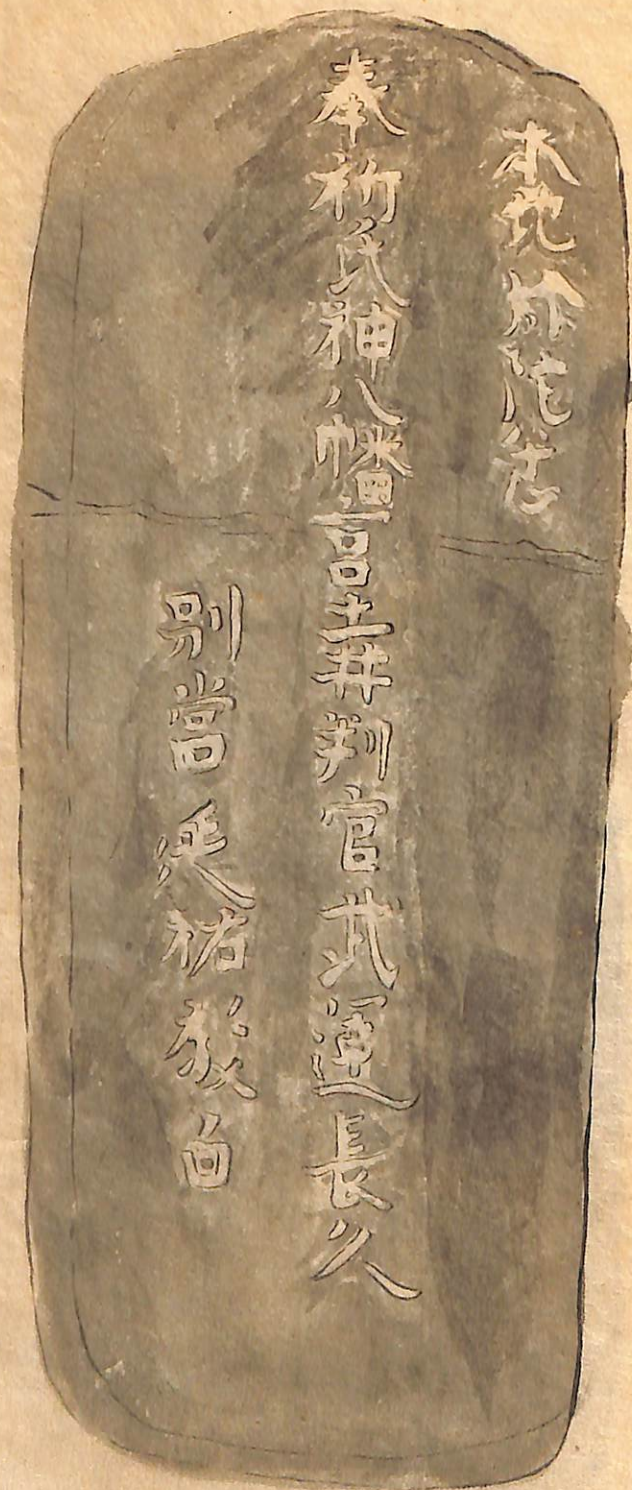
其色ハ煤ケ多ク黄褐色カテ甲表ノ方小文様
細文様筋ノこと

此中東明沃村ノ金野川ノ
也

甲

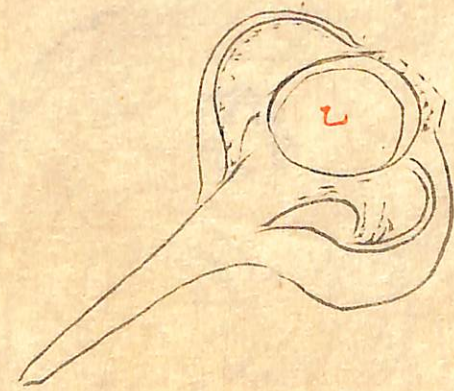
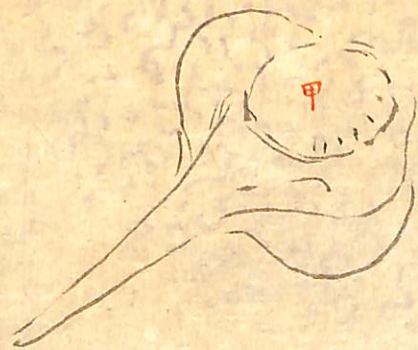


鏡首といふ大町ノ津輕ノ市甲村ノ山崎圖書ノ家藏ノ龍首長二尺七寸許
至テ重一ト三河ノ玉ノ響母ト云ふハ又ハ世ノ白雲カテ青色ハ口ノ
直二尺斗中ハ破キ其外ノ如ク不尺一ト云々中ハ此石多ク



管原理右衛門家藏

信濃國伊奈郡の山溪より出てし人のはきしハ鏡骨のいまだあられざる
其鏡骨甲の表は方ハ龍頭の皮と肉とをわけて乙種の方ハ肉のふつぷりあり
りておまハれりハ蛇蛸蛇もあられハ
鏡あられでふんあり
クむりー讃岐國九竜海より出ハ
牙の長サ三天三夜目ありし
鏡骨乙種
龍骨を家
藏ハハ大失
とす
い



長和五年十月四日

7

3
 2
 1
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

孫

北
牀
東
葉
知
通
書

土肥氏の由来

増田城主の後苗八取上、新庄戸澤^{キミ}、家中多し戸澤氏と
いふ山北郎角館は城主として戸澤免九郎盛安の後胤土肥氏家
士^{ミト}となりて新庄家中下中町となりて土肥源八郎となりて百二十石の家
て本は増澤八郎といひ、今とて土肥氏と土肥次郎道通と
勇士土肥氏古と土肥氏といひていつの世より土肥氏といふきけり
古きものハミエ土井氏より明澤山の棟ね奉建立金峯山藏王
堂一字^{鬼門}鎮護城境堅要天文元年四月日土井道近別當能定坊
よりおきき其外のものも之より土肥と土井とハ肥^ヒと井^イと
いひてあるなりと一永慶軍記廿六卷小岩崎合戦六卿一味事
よりいふとより小岩崎遠に守義通と最上の謀り通て家臣

八柏を討て湯澤の城を落し孫七郎兄弟を討て其上二門
を心留りて最上は從小刺へ岩崎の城主原田大膳今横手
を攻落さん云ふ由すえ一は安うぬ事と思ひ原田大膳を討ん
どて議せらるけり原田是と聞て居る敵を防へ武畧代至る
事あり半途小出て敵を追ひ散る水瀬川を渡り進藤野が
陣取りけり小野寺と新道といふ東雲の如きに横手を打出
相從小軍兵より合弟吉田孫市小野寺小五郎関に能登守吉
田草人田村左衛門八木藤兵衛馬澤和泉同甚兵衛同友吉
同嶋久米熊谷榎内金子大澤落合本林左馬允菅内記三村
中務と先りて六百餘騎次六郷の城主二階堂兵庫頭正則
合弟金澤権太郎他の勢を交む五百餘騎一軍引後れて

後陣を掛けける是より兼て岩崎小味内通ずる依て小野寺
が裏切りせんとの軍慮に係る馬倉右兵衛尉三百人小野寺が陣
小馳けり植田鍋倉今泉川熊と三百人水瀬川の岸小添ふ
て直に岩崎の城を攻めし隙合も此勢合て三千八百人既高陣
其間近ふれば小旗と差上関て仰て鼓貝ヲ鳴らる
該炮を打掛るゝとせんや我々横手は多勢と云ひ数度の
場馴れんと兵ども吉田草人々馬澤和泉同甚兵衛金八郎を
利三郎三村中務嶋森氏部及川玄番加藤五郎左衛門佐川守
而法師光泉寺廣徳寺を先りて一足り退るが横手操へて
を攻めける原田大膳心も剛なりのかゝる無事なれば叶いて
一陣破て陣営も合ふと云ふ岩崎よりして引退く横手方小

野寺小五郎と先年八内にて京甲斐を破る。其後念で散せ
と今日の先手やで侍ける小五郎、将家来、其系の具置、紅羽織、著
川原毛の馬、打乗り、真先に進み、敵の大將目、掛て追蒐、水
瀬川の岸、其既に追詰る大膳、是えける処、右内夏
取て返、小五郎、引廻り、川岸の虎落、隙に伏せ、力て拔
て、こゝ通も小五郎、涼手、其遂ふ其処、死せける百人
を起し、も不立、敵餘多、突甲、其間、大膳、水瀬川に
渡し、馬より飛で下り、川岸の村、立ち、柳の中に入り、甲で脱捨て
弓押取り、散る小射、其外、精兵の手利、七八騎、指詰る
引詰り、散る小射、掛る小鍋、倉圖書、同金藏、佐藤、権左、門
小野寺、小心替りて、岩崎、免来り、是ハ鉄炮の上手、川

白の敵、三騎、おて、其も、こゝより、横手、勢川に渡り、其
岩崎、勢僅十七人の外、此玉矢、防はて、三千餘人の者、ど
河に渡り、不得事、小野寺の運の末、成り、其を、おれける
去後、岩崎、大膳、女房、今年廿二歳、成り、其味方の、負軍
其城、内、引退、由、聞き、小具置、著て、長刀、杖、突き、立
出て、大成、樽を、廣庭、小おき、出、酒と、多、敗軍、して、奉
軍兵、ども、引き、自取、飲、め、我今、敵陣、おて、出、せ、志し
有、このハ、冥途、黄泉、まで、供せ、よう、と、いひ、け、其、戦い、疲し
多、負、ども、流、血、を、押ぬ、ぐ、い、大膳、二、夜、死、な、い、ふ
け、後、ハ、命、で、惜、み、さ、う、い、い、最後の、軍、清、く、侍、さ、う、い、い、と
以上、白、原、騎、の、者、も、轡、で、並、て、掛、出、る、京、田、の、女、房、是、と、い、て、麻、毛

あゝ馬々打乗くあゝあゝ其様山吹色の小貝を著て同毛の甲は下り
長成る黒髪はばつと乱れ紅の袴態の皮尻がや拭くや太刀をはき
て長刀のひらみ水瀬川に瀬枕打て流るゝ白浪小馬で乗入し流し
ける同齡二十才の女二人小貝を著て鍬を拵り左右に續きけり
岩崎の白浪騎横手の大勢サもあゝいざ切て鬼其勢い実
か命を塵芥にも輕いぞね致し懸る処不増田土肥次郎道
近七十騎にて岩崎方々馳けり横手勢是よりて岩崎六増
田稻庭等の大勢より加勢より足えりといふまじく馳きつ
早裏崩して足えければ岩崎勢是より力を得てゆるぎを泄ま
と進む勢より大將大膳原田五郎右内多丸土門源金藏同圖
書依藤權左門土肥次郎同郎等より山内主殿安部五郎丸土門
宗左門を先して面をみだり突て入る此鎗先より突まられさる

剛に横手勢より討死大勢より一度小咄し崩きより
岩崎勢勝小乗より進出し去れども過半はも負ぬ人馬弱
て續くものハサレ増田勢岩崎勢合て漸く五六十騎の外はし
此時横手勢心を一致して返し合はる程に大膳で始りて
いざ討ぬべきものでいざー大勢はバ槍鞭を打て北より
降るゝあゝいざ進出し後陣にけり黒澤和泉六騎より
取返さる大膳が女房長刀より打てり丁々打てり黒澤
馬より下に落ちる續け打てりも不立お止めり二人の女と鎗
敵一人死に倒れ一人の女も手負けれども事どもせぬ馬より
乗り返りける黒澤六騎討死されば其間小野寺義道は遠く

落延て横多進みぞ引退く六郷兵庫頭小野寺の幕下し
て後陣小堀けりて最上頼れ岩崎内通一けきバ
心や掛て侍居けり小野寺負軍せり見たり横手勢
の先きまで引返一六郷ハ引れせど横多の廓ハ蒐入て町ハ火
ぞ掛る折節ハ風烈く吹て降煙四方ハ充ち多義道此煙りぞ
見て叔ハ六郷心替と賞へり道ぞと云候小横手とて蒐来り
兵庫頭正則心得りて云いハ敢入りて相戦ふ然れども横多ハ大勢ハ
正則危く見えり知小舎弟金澤權太郎神尾町兄弟太田依藤
淡路小田嶋内訖武田金左門あて云ハ覺へのものも今限り
小防ぎ戦ハ味方の討死ルサ其日ハ漸く暮きければ両陣人
數ぞ引たりあまう小軍急よいて小野寺の嫡子友京亮ニ処迄

無を蒙りけり横手方ハ里澤和泉守小野寺小五郎と先として
三百五人討り岩崎勢古内百八人浴倉喜兵衛と始の六十八人討り六
郷勢ハ横多合戦ハ五十餘人討り敵と其頃と討り六郷一族ハ
神尾町藏人今朝先手とて神尾町の城で出一時團扇の前
指物折して落し馬ハ前足より微塵も踏み折る是と不吉
なりとも思ふ大事の門出ハ色も出さず有りや横手
の合戦ハ小野寺とすえ一檀田淡路と鎧と金尻拂いて人数
引取りけり何地も来りけり鉄炮の玉で額と諸留の馬より
落て二言とも言ひ死にけり此藏人六郷家と何れ一方の大
將ありかおかく死にけりこそ無慚なりとて同書三十六卷ハ
慶長七年云増田の城ハ長瀧内膳進在りと依竹の郎守

前澤筑後守入道藝球請取て今宮棋洋守居城し事
ちととととと土肥に最上と降りてや同書三十三卷に最上
勢山北出陣攻法領館事といふ処に山北の住小野寺遠江守義
道始に内府公の所味方として會津對治の人数に被催嫡子藤
太郎光道最上郡山形に雖參陣時の變違を考へ飯俣せし後
石田治部少輔三成と味して上枚黃門に牒合せ最上を攻んとせし
に石田方敗れしに折し箭をさし風情をば軍慮空して
相止ぬ此亦細先年最上を降ししに土肥次郎道年山北喜好
の者がば付しに義光の前を出て披露をさし最上
を為小日末の敵をば是を幸に山北で退治せしに義光の二門老臣
を集めて評定して軍位を定の兵卒としに向ふに唯勝の大將と湯沢

豊前守満茂其外先手の大將魁登典膳嫡子在門尉丹
子三左門尉兼内者として土肥二郎道年を八口内表し打入
山田深堀柳田を攻落べしと下知されしと見えしとあり
月山堂の碑に當社月光山者往古小笠原信濃守冬廣當
所居城其後土肥相模守道近文禄年中近居城をいふとあり
まの圓満寺の祖と土肥次郎實平の末孫増田城主土肥次郎
高平三男主計之父といふ

甲増田新町の辻松

庚申、石神と齋ふ

祭日 雲社

37
3
3



甲麻當山武則真人の古城蹟之
 但人真人との城跡といふ所の跡ハ
 絶頂に在り藤原の水神ノ社
 西瀧の不動下平康村此源ハ
 陸奥国栗駒山の山脚雄勝郡
 朴木山のふもとに在り田郡
 赤瀧谷といふ處に山守の家ハ
 遠く分分水川といふ流あり
 乙亀田平康西村の中橋あり
 丁雄勝郡の東に秋の袋といふ
 一村ありと云ふ方子明神とい
 稲荷の社ありといふは津輕の
 行子といふ處ありかこの茶屋と
 人といふは片子と早蕨の事
 又て堅香子の衣の事 歌ふ
 みらぬ人かといふ山といふ
 名地をいふこと 詠りいふや

○東

○南

辛

庚

西

戊

己

○西

壬

○北

土桐木平むー
 いり 大なる桐木
 あつて花つとつ
 その世ハ平康のといふて
 真人山に挿り
 こゝに在り 此桐木ハ
 貢ふてまゝに
 乙男神様といふ
 女神といふ山あり
 いふは女神といふ
 陰陽ふはけは女神といふ
 乙と云ふ
 上豊田村の
 虹が澤といふ
 ほろろふろろ



○北

甲 長者森の
ありふた
暗昏澤より鞍借澤
倉野沃より処あり
そこふ西電々森々
云い村ありくへ
林ありつて電田いふ
まゝ雌神雄神の蛇
てあやふくくつて
あめけちあやふくく
上電田村のくくくふりせ

甲

乙

丙



丁

丁 三貫櫻より銭懸さく
いふいふいふいふいふ極の
いふいふいふいふいふ極の
多ういふいふいふいふ極の
いふいふいふいふいふ極の
上電田の三貫櫻のくくくふりせ
三貫櫻の三貫櫻のくくくふりせ
寒泉のくくく北さきふか入ん花の方か
山澤のくくく高垣のく

戊

○南

己



○東

甲 明澤邑の金峯山ハ
芳野の山にみけとて
藏王権現とすつる
山ニ乙 雄神森
丙 兜ヶ森
丁 兜ヶ長嶺
戊 三ツ木
己 真人山ニ愛宕ノ社
壬 栖場邑 庚 深江村
金沢島の林

かし
かし
かし



○南

○北



○西

増田村

家員

三百四拾八軒

人數

千五百三拾八人

馬數

九十二足